



福井大学教育学部
附属義務教育学校

No.05

令和6年3月8日

学校だより

卒業証書授与式 校長式辞より（抜粋）

（略）今日、本校を巣立つ104名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして保護者の皆様にはご多用の中、ご参列を賜り、感謝申し上げますと共に、お祝い申し上げます。

（略）附属の代名詞ともなっている「社会創生プロジェクト」。入学以来、長い学年討論の末に、学年目標「共鳴～自然となれ～」が決定したのは7月8日、その後社創テーマが「畑ではたらけプロジェクト」に決定したのは10月12日だと聞きました。その間の、紆余曲折のプロセスは、当時は意味がないものを感じた人もいるでしょうが、今振り返れば、誰もがその価値を感じ取っているに違いありません。「早く意見をまとめたければ多数決は簡単だけど、それでは否決された立場の人とこの先一緒にやっていけるのか。そもそも全員参加の議論ができていたのか」と悩んだ君たち。そこで「ファシリテーション」という言葉と出会いました。同時に、この時間の学年討論のゴール、最終的なプロジェクトのゴールを記載した「アジェンダ」や、それを授業やプロジェクトの最初に共通理解する「マインドセット」も学びました。これらを武器に、一歩ずつ協働探究を進めていくことになったのです。「対立やジレンマと向き合い、乗り越えていく力」は、これからの社会を生き抜くために必要な力です。「ファシリ」という単語が、これだけ日常語になっている学校は他にないでしょう。

「畑ではたらけプロジェクト」では、研究や、虫・気候対策など5部門に分かれ、実際に畑を作り、幾つかの野菜の収穫に成功しました。文京キャンパスへの移転によって畑を失うというアクシデントに見舞われましたが、社創の火は消えず、校外学習に出て、「未来の農業のために何を解決すべきか」というテーマにシフトし、「共鳴～若者×農業～」という社創ドラマに結実させました。「学うた」と合わせて、感動的な校内発表で、後輩たちは大きな影響を受けたようです。ハピテラスでの発表も成功裏に終わりました。

ファシリテーション力の向上により、思いの共有が進み、次々と魅力的な活動が生まれました。「我武者羅」をテーマにした体育祭と、「#青春」がテーマの「文化祭」はその代表格です。応援や競技にかけた情熱、自分たちで選んでやり切った学級演劇とクラス合唱成功の歓喜。クラス合唱では、君たちの最高に充実した表情を見て、熱いものが胸にこみ上げてきたのは私だけではないでしょう。

活動を重ねるたびにクローズアップされてきたのが、君たちの学年目標「共鳴」でした。「学うた」の中に「泥だらけになって、逃げだしたくなって、立ち止まった時、背中を押してくれたのは、共鳴にあふれたこの無限大の絆」という歌詞があります。苦しみながらも走り続けられたのは「共鳴にあふれた無限大の絆」であり、その絆は、さらに強く深く編み込まれていきまし

た。何度か紹介したアフリカのことわざ「早く行きたければ一人で行け、遠くへ行きたければみんなで行け」を実行したのです。

君たちの手によって、継続議案であった校則改正もなされました。その過程では「この議論ではまだまだ不十分」と、臨時生徒総会を開いて、議論を深めていきました。結果ではなく、そのプロセスに意味を感じ取っていたのです。

生徒と共に創る授業は附属の大きな特徴ですが、ここでも君たちはプロセスに価値を感じ取っています。次のような振り返りが多数あります。「数学の授業のイメージは答えを出すための公式を覚えるというものだったが、附属の数学は答えにたどり着くまでの過程を大切にしていた」「体育では、自分たちでどうしたら勝てるかと考察して練習メニューを作る。試合を挟むことで新たな気づきを得、次の練習や作戦につなげる。この授業は附属らしいなと思った。省察も探究も自主協同も入っている授業だった」

この、プロセスに価値を感じることは「省察すること」によってもたらされたと思います。

「省察ノート」や、要所要所での振り返りシート。その中で君たちは自分の学びを深く捉え直します。時には生き方でも。自分と向き合うことは楽しいことばかりではないことも学んだことでしょう。次のような省察をしている生徒がいます。「0から1を生み出すことの難しさ、学びの楽しさ、自主協同の価値、いろいろなことを実感することができたのは省察があったからだ。それらはその時は感じていなかった、過去の省察を省察する過程で得る視点である」と。経験は省察することで新たな意味をもち、行く先に光を灯してくれるのです。

「ファシリテーション」と「省察」を武器に、君たちは「探究」を続けてきました。そして、大きな手ごたえを得た君たちにとっては、この経験を次世代に伝えていきたいと願うことも必然だったことでしょう。7年生の時はコロナ禍で活動制限され、8年生8月からは文京キャンパスでの生活で、他学年との交流が不十分だったことも影響しているでしょう。幾度にも渡る校内ラウンドテーブルの開催や、動画やHP、省察本づくりなど、卒業間近の君たちの姿は、君たちより活動制限が強かった先輩方の思いも乗せ、「文化継承」であると同時に、共に新たな価値を創り出す「協創」の姿でした。「伝統というものが、昔は苦手だったのですが、今は後世まで続いてほしい、残していきたいと強く思うようになりました」と綴っている生徒がいます。君たちの熱い思いは間違いなく後輩たちに受け継がれ、この附属をさらに発展させる原動力となるでしょう。



君たちが歩んできた跡には、まさしく「学うた」の歌詞にある「それぞれが違う実をつけて紡ぎ出したストーリー」が生まれました。臨床心理学者の河合隼雄は「生きるとは自分の物語を作ること」と述べています。予測不能な未来であっても、皆さんがこれから綴るあなただけの物語の価値は変わりません。「自主協同」の精神に支えられた、壮大で、希望に満ちた物語を創り続けていってくれることを祈っています。（略）

令和6年3月8日 福井大学教育学部附属義務教育学校 校長 牧田秀昭